

## 医療的ケア児の育ちを支える地域連携

鎌田 晃子

熊本市市民病院

医療の進歩とともに医療的ケアを必要とする児の数は増えつつある。特に、NICUの在宅移行期にある子どもの家族は、出生直後から家族と分離された環境の中で、親子関係の形成に取り組み、病状管理や医療的ケアの習得も同時に求められる。

医療的ケア児の支援においては、子どもの成長や発達段階に応じた支援のみならず、家族形態や生活環境の変化に応じたネットワーク化を図っていくことが求められ、様々な支援を全体的に調整しながら、総合的に支援を提供していく必要がある。しかし、医療的ケア児への対応力や福祉サービスについて、多くの課題が残されており、通り一遍の関係機関の調整をするだけでは、課題の解決にはならず、活用できる資源の開発にも同時に取り組んでいく必要がある。そこで、入院早期から地域の資源を把握し、医療・保健・福祉・行政・教育の連携の場を創りだし、自宅退院にむけた準備を家族とともに一緒に進めていくことで、スムーズな在宅移行が可能となった。また、訪問看護師と病棟看護師が、退院前訪問を実施し、自宅環境に合わせた退院支援計画を立案することで、入院中から退院後も一貫した医療的ケアの習得が可能となった。家族にとっては、訪問看護師と早期に出会うことで、安心感がえられ、個性を尊重した生活に即した継続的な支援につながった。

医療的ケア児が、住み慣れた場所で地域生活が継続できるためには、関係機関・関係者との連携が不可欠である。医療的ケアを必要とする子どもは、成長とともに社会活動の場もかわっていき、利用する医療機関も複数もちあわせている。病院と在宅・学校では、医療的ケアの管理方法も違い、子どもの医療的ケアの習得段階に応じて支援方法も異なる。

医療的ケア児と家族は、“地域にでて、もっと普通の暮らしをしたい。自分らしく社会生活を送りたい”と心から願っている。関係機関のみならず地域全体で支えていくことが求められているが、医療的ケア児の支援が進まないのは、医療的ケア児のニーズが希少であり複雑であること、幅広い分野に跨がって高度かつ個別的な対応が長期間に渡って求められることに要因がある。

シンポジウムでは、医療的ケア児とその家族が直面している状況について、当院での活動を交えつつ紹介し、課題の解決に向けた方策について議論する。